

談話進行上の質問発話の特徴

— 中間報告 —

高崎 みどり・早川 治子・本田 明子

1. 研究の概要

我々は、共同研究のテーマとして、談話を進行させる上で、質問発話がどのように機能を果たすか、そして性差・場面差とどのように関連づけられるかをいくつかの角度から見ていくことにした。今回は、中間報告で、全部の資料の分析を終えてはいない段階だが、現在、共同研究を続けている中で固まってきた方向を示してみたいと思う。

以下、2で研究方法を、3・4で実際の資料を分析した中から気づいたことをいくつか報告する。

なお、性差・場面差については考えるところもあるが、一応今回は、考察を差し控えることとし、すべての資料の分析を終えたあとの最終報告で述べることにしたい。また、以下でとりあげる用例や数量的分析の対象は、同じ資料を使った共同研究「職場における女性の話しことば」（現代日本語研究会 東京女性財団1993年度助成研究報告書）に印刷され公表された巻末資料の範囲からとるようにしたが、一部それ以外の資料を使用したものもある。

2. 研究方法

2-1 分析の観点（質問発話を取り上げる理由）

この研究では「職場における女性の話しことば」の特徴を談話という側面からとらえ、さらにはそこになんらかの性差がみられるかどうかを検証しようと考えている。談話という角度からの資料の分析にはさまざまな観点が考えられるが、今回特に質問発話を取り上げて分析をおこなうのは次のような理由による。

- ① 質問発話は話題の導入に用いられることも多く、談話の進め方のひとつの指標となりうると思われる。
- ② 形式が比較的はっきりしていて取り出しやすい。
- ③ 従来の性差研究では女性は男性より丁寧であり、婉曲に話すといわれている。質問発話は相手にこたえを求める、ターンの交替を話し手の意志で決めるという点で相手にかける負担の度合いが普通の発話よりも高い。相手にかける負担の度合いが低い方をより丁寧だとするならば、質問発話の用い方にも男女差がみられるのではないだろうか。

2-2 質問発話の定義

次の a～d の要素をどれか一つでも持つ発話を（形式上の）質問発話とする。

- a 文中に特定の助詞「か」を添える。
- b 文中に疑問詞を用いる。
- c 文末の音調を上げる。
- d 「かしら」「かな（あ）」を文末に添える。

（a～cは宮地（1980）、dは斎藤（1989）による。なお、斎藤（1989）にはこのほかに「終助詞「な」「ね」を文末に添加して確認要求を表す」という要件があるが、これは「な」「ね」という形式上の条件だけではなく、また、「な」「ね」が文末にある確認要求であればcの要素を持つものと思われ、この要件を除外しても対象となる発話の範囲は変わらないものと考えた。）

2-3 研究の流れ

本研究ではまず、定義に従って形式上の質問発話を取り出し、それぞれについて、どのようなコミュニケーション上の機能を持つかという点を分析することとした。質問発話のコミュニケーション上の機能はいくつかの要素によってさまざまに分類することができる。本研究では、以下に示すように話

題の進行・展開にどのように寄与しているか、相手に対してどのように働きかけているかという観点から質問発話の機能を分類した。この分類に従い、形式と機能との係わり、話し手・聞き手の性、場面などにより、質問発話がいかに使用され、コミュニケーション上どのような働きをするかを考えていきたい。最終的には質問発話を軸にした談話進行のストラテジーを明らかにし、ストラテジーにみられる性差、場面差といったものを解明することを目指す。今回の中間発表では、前述の観点による機能の分類の現時点での大枠および形式と機能との関わりに関する分析の例を示すにとどめた。

2-3-1 質問発話の機能

① 話題の展開を軸にした機能

質問発話は話題の転換のきっかけとなることが多い。そこで、談話をひとつのまとまった話題ごとの部分に分け、各話題のなかで質問発話がどのような機能を持つかを分類してみた。この機能を持つ質問発話の現れ方をみることにより、大きな談話の流れのなかでの質問発話の役割が明らかになるのではないだろうか。

a 話題の導入

新たな話題を導入、提示する働きを持つもの。

b 話題の継続

ある話題の別な側面を示して、話題を発展させたり、すでに提示されたものについて質問して談話の進行を促すもの。

c その他（話題の阻害）

話題の進行を妨げたり、すでに話された話題に引き戻したりする働きをするもの。

② 相手に対する働きかけの機能

質問発話は基本的に相手に対して何かを求める場合に用いられるが、何を求めているのか、つまり、相手に対してどのような働きかけをしているのかによって分類すると、これまでのところ、次のような機能があ

らわれた。

a 情報要求

話し手が自分の持っていない情報を相手に要求するもの。質問発話の本来的機能。b以下の場合も基本的にはこの機能を有すると考えることができるが、aに分類されるのは情報要求以外のプラスアルファの機能を持たないと考えられるもの。

b 聞き返し

相手の直前の発話をもう一度繰り返すよう求めるもの。

c あいづち

「そうですか？」のように質問形式をとるあいづち。

d 促し

「ん?」「それで?」などのように相手の発話を促すもの。

e 自問

「あれ、どこへいったのかなぁ」などのように自分に対する問いかけの形をとるひとりごとのような発話。質問に対して相手が反応せず、結果として自問になった場合も含む。

3. 相手の反応とペアでみた場合

上記2-3-1のような機能のラベルを貼っていくとき、質問発話に対する聞き手・相手の反応の部分まで見ないと、機能が決定されないケースが多いことから、質問発話を投げかけられた相手の反応をも考察の対象とすることとした。この相手の反応、といっても言語表現されたものに限定されるが、大きく3種に分けてみると、

1. 直接に答を返す場合

2. 全く答を返さない場合

3. 間接に答を返す場合

となる。これには、その会話場面における人間関係や力関係が反映されやすいように思われる。1・2・3の分け方を資料中の例を使って説明してみる

ことにする。

たとえば、〔HA・会議〕で

219：若いっていくつだよ。〔他者 男〕

220：65です、先生と確か。〔Inf 女〕

という場合、219の質問発話は、〔情報要求〕で、220の相手の反応は、要求に答える〔情報提供〕となり、質問発話に直接、言語表現としての反応を返すものとなっている。

一方、2の全く答を返さない場合は、同じ資料中で

261：小説の、ま、スケルトン、これについては、あの一、コピーをしてこなかったんですが、ここで議論されるようでしたら、あ、ありますか？〔Inf 女〕

262：あの一、ここで議論されるようでしたら、コピーを依頼してきます。
〔Inf 女〕

のように、相手が言語表現として直接反応を返さず、質問発話の話し手が、そのまま話し続けるというような場合がこれにあたる。この例は、相手の反応がないために自分で話し続ける場合だが、次例のように、相手が反応を返しても俗に言う“はぐらかし”のように、直接にも間接にも答になっていない場合も含む。

この例は、〔AM・朝〕の、小学校教員〔Inf 女〕と児童〔他者 女〕の会話で、

96：うちのと時間割ちがうよ。〔他者 女〕

97：あ、ほんとか。〔Inf 女〕

98：月曜日、4時間目が算数だよ。〔他者 女〕

99：じゃ、ちょっと一、あれとか、あれで直して、あれがほんとだから。
〔Inf 女〕

100：そう？〔他者 女〕

101：ね。〔Inf 女〕

102：ほんとにほんとなの？〔他者 女〕

103 : だから、直しといて。

〔Inf 女〕

児童の102の「ほんとにほんとなの？」という質問発話に対して、103ではそれに言語表現で答えることをせず、「直しといて」という要求を再度もちだしている。このように、相手の情報要求に応えないで、別のことがらについて言語表現をしているような場合も含む。3の、間接に答を返す場合というのは、1と2の中間で、直接の答ではないが、全く答えないというわけではない、という場合である。これには、いろいろなケースがあって、たとえば〔HA・会議〕の資料で、

273 : あっ、プリントアウトされてないんですか？ 〔Inf 女〕

274 : だから、あれしかないよ、あの一。 〔他者 男〕

のように、273の〔情報要求〕に対して、直接に、「（プリントアウト）している」「していない」という〔情報提供〕の答えを返さずに、「あれ（＝プリントアウトしていないもの）しかない」という答え方によって、つまり〔プリントアウトしていない〕という答えを間接的に返している。これが、典型的な、間接に答えを返す場合である。

次に、結果的には答を返しているのだが、質問発話の直後には返さずに他のことを述べ、いくつかの発話を経て、答えを返す場合がある。これも、3の間接的に答えを返す場合に入れた。資料〔AM・朝〕中の小学生（他者不明）と先生〔Inf 女〕との会話で

111 : どこに一？ 〔他者 不明〕

112 : ん？ 〔Inf 女〕

113 : どこに出せばいいの？ 〔他者 不明〕

114 : もう出すとこいっぱいだね一。 〔Inf 女〕

115 : ん一。 〔他者 不明〕

116 : じゃ、ここでいっか一。 〔Inf 女〕

117 : ここの上に出して。 〔Inf 女〕

この場合は、112の聞き返しから117で答えを返すまで、5発話を経ている。遅延型とでもいうべき答え方である。117が言語表現されず、流れてしまって答えが返らないと、上記2の、全く答えを返さない場合の〔はぐらかし〕になってしまうものである。質問発話をした側の話し手としては、答えが返ってくるまで緊張感を強いられる展開となる。

また、言語表現として何らかの反応は返しているのだが、あいづち的な発話で、情報提供がなく、答えとはいえない場合がある。これも、3の間接的に答えを返す場合に入れた。〔HA・会議〕で、

296: なんか、あれ、なんかなあ、あ、その会社での、あれがあるんじゃない?
〔他者 男〕

297: 就職歴があるんでしょ。
〔他者 男〕

298: あ、そうなんですか?
〔Inf 女〕

この298は、「ある」「ない」で答えるべきところを、その根拠となる情報を持たないために、どちらとも答えかねている。296、297の質問発話の発し手がある程度情報を持っており、「あるんでしょ」という、〔情報要求〕というよりはむしろ念押し・確認の意味合いが強い言語表現をとっている。ゆえにこの質問発話は、相手の肯定あるいは同調の答えを予想し、促していると考えられ、最初に掲げた分類に照らすと、「促し」にあたるのではないと思われる。そしてそれに加えて、答えになるべき298「あ、そうなんですか」もまた質問発話の形式をとっているということになる。これもやはり情報を要求していないし、軽い驚きも加えて、自分が知らなかったということを表明して、相手に話を続けさせるあいづち機能を認めることができる。

上記のように、答えが〔情報提供〕とはいえないような場合は、質問発話の方も当然〔情報要求〕とは異なる機能であることが推定できる。今回資料中で特徴的であった、質問ではないのに文節末や語尾のイントネーションが上がる言い方にもそれはあてはまる。つまりたとえば、〔SI・休憩〕の

32: だから普通の家を一。
〔Inf 女〕

33: ん。

〔他者 女〕

34: 貸してる？

〔Inf 女〕

33: あーあー。

〔他者 女〕

この34「貸してる？」は、発話者が自分の体験を話しているところで、相手に何かの情報を求めているわけではない。だから、33もあいづち表現になっているのである。

以上、答えの返し方と質問発話とをペアにして見てみると、談話の展開に質問発話が果たす役割を、より正確にとらえることが可能であるものと思われる。

質問発話には、相手の反応を求めたいというコミュニケーション上の要求がベースにあり、それに相手が答えた時に、コミュニケーションが成立し、談話は進行したといえよう。たとえ、発話者の求めているものが情報でなくとも、また、相手の反応が情報提供でなくとも、〔質問発話－答え〕という形が頻用されるのは、〔働きかけ－反応〕という、コミュニケーションの基本原理が、単純なかたちでそこに存在するからであろう。会合などでの初対面の会話や、語学の会話練習に、質問発話がよく使われる表現であるのも、そこでやりとりされる情報よりも、やりとりそのものが目的で、形ばかりではあってもコミュニケーションがそこに存在するからである。

ゆえに、〔質問発話－答え〕を性や場面についてみてゆけば、コミュニケーションの成立の可否や程度、質などの観察が可能になるのではないかと考えて、現在、分析を行っているところである。

4. 質問発話の形式と反応の出力の多寡

質問発話、とくに情報要求の質問発話を観察する場合、働きかけvs反応というペアでみることができる。今回は第1ペア要素の質問発話の形式（「－か」を用いるか、「何」を用いるか等）に左右される第2ペア要素（回答部分）の出力の多寡を見ることにした。

4-1 分析の手順

- ① 前述の定義にしたがい質問発話を a 情報要求、b 聞き返し、c あいづち、d 促し、e 自問に分けた。今回は a 情報要求の質問発話のみを分析対象とした。つまり「A、B 二者間で明確なターゲットとなる新情報が受けわたされることが期待される」ということを質問発話→答えの基本的な意味、及び形態と考えたからである。以下の表の（ ）を満たすもののみを対象としたわけである。

(話者 A)	(新情報要求)
(話者 B)	(新 情 報)

例えば以下の情報要求の質問発話と回答のペアの例は（ ）内の要求を満たす。

〔H I・会議〕 425 (話者 A) : あー、そっか、1 日の遅刻ってこと？
(肯定か否定か＝新情報要求)

426 (話者 B) : うん (肯定という新情報)

しかし、b 聞き返し、c あいづち、d 促し、e 自問はそれぞれ条件から逸脱する部分があるため対象から除いた。つまり b 聞き返しは完全な新情報ではない、c あいづちと d 促しは明確なターゲットとなる新情報が話者 A に意識されていない、e 自問は 2 者間のやりとりではないという理由からである。

- ② a 情報要求の質問発話をその質問内容の指標となる疑問詞の種類・疑問の助詞／イントネーションから 1 から 4 に分けた。

1. 文末に「一か」を付加またはイントネーションをあげるもの＝
YES, NO QUESTION＝CLOSED QUESTION (以下 C Q と略す)
2. 疑問詞「何」「いつ」「どこ」を用いるもの＝OPEN QUESTION
(以下 O Q と略す)
3. やり方の説明を要求する疑問詞「どうする・どうした」を用いるもの (以下 D Q と略す)

4. 理由説明を要求する疑問詞「なぜ」「どうして」を用いるもの
(以下NQと略す)

4-2 分析結果

分析結果①は質問形式により回答を得られる率に差があるかどうかをみたものである。CQによる質問には回答が得られない場合がある。反対にOQ、DQ、NQつまり疑問詞による質問、これはサンプルが少ないので参考としてではあるが、一例を除き確実に回答が得られている。言い替えれば確実に回答が得たければ疑問詞を用いて質問をすればよいということが推測される。但しOQ、DQ、NQは今後母集団を増やすことが課題となる。

《分析結果① 質問形式による回答率》

() 内は回答数／質問数のパーセント

*今回は回答部分の聞き取れないものは対象から除いた。

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
CQの質問数	11	17	25	17	14	84
回答数	9	15	24	14	13	75
	(82%)	(88%)	(96%)	(82%)	(93%)	(89%)
回答せず	2	2	1	3	1	9

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
OQの質問数	1	3	2	9	0	15
回答数	1	3	1	9	0	14
回答せず	0	0	1	0	0	1

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
DQの質問数	1	0	2	0	1	4
回答数	1	0	2	0	1	4

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
JQの質問数	0	0	1	0	0	1
回答数	0	0	1	0	0	1

分析結果②－１は回答にターゲット以外の新情報が付加されているかどうか（注）をみたものである。例えばC Qにおいては回答部分に「はい」、「いいえ」以外に何か情報が付加されているかどうかを見た。但し、C Qに「はい」、「いいえ」以外の情報が付加された場合、「はい」「いいえ」は省略される場合もある。

《分析結果②－１ 情報付加率》

（ ）内は情報の付加された回答数／総回答数のパーセント

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
CQの回答の	4/9	15/15	16/24	10/14	9/13	54/75
情報付加	(44%)	(100%)	(67%)	(71%)	(69%)	(72%)

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
OQの回答の	1/0	0/3	0/1	0/9	0/13	1/26
情報付加						

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
DQの回答の	0/1	0/0	0/2	0/0	0/0	0/4
情報付加						

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
NQの回答の	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/1
情報付加						

これから〔HA・会議〕の一例を除き、O Q、D Q、N Qの回答には情報が付加されていないが、C Qの回答には付加されやすいということが観察される。

また回答が肯定であるか否定であるかによって情報の付加されやすさに差があると考えられる。つまり否定の場合は言い訳などが付加されやすいと想定される。そのため肯定回答と否定回答の別による情報付加率の多寡をみた。その結果は、《分析結果②－２》のようにやはり否定の場合はほとんどすべての回答に情報を付加していた。肯定の回答の情報付加にはバラつきがある。今後より詳しい内容の分析が必要である。またこれも限られた資料内での結果であるため母集団をより広げる必要がある。

《分析結果②－ 2 肯定回答と否定回答の別に見る情報付加》

() 内は情報の付加された回答数／総回答数のパーセント

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
肯定の 回答の 情報付加	4/10 (40%)	10/10 (100%)	7/14 (50%)	8/12 (42%)	4/8 (50%)	33/49 (56%)

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
否定の 回答の 情報付加	1/1	4/4	4/5	2/2	5/5	16/17

	HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩	計
肯定か 否定か不明 しかし 情報付加	0/0	1/1	5/5	0/0	0/0	6/6

分析結果③はC Qにおいて「はい」「いいえ」を明確に言うかいわないかの対立をみたものである。「はい」「いいえ」はその変項である「うん」「いや」等も含む。

《分析結果③ 「はい」「いいえ」の出現率》

「はい」又は「いいえ」のあるもの：「はい」「いいえ」を含まないもの

HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩
4 : 5	1 : 14	5 : 19	6 : 8	8 : 5

これをC Q全体の回答数に対する「はい」「いいえ」のある回答数でみると

HA・会議	HA・休憩	HI・朝	HI・会議	HI・休憩
(44%)	(7%)	(20%)	(42%)	(61%)

という結果が得られる。これからわかることは会議の場面では「はい」「いいえ」を省略せずに明確に言うことが、[HI・休憩]以外の[HA・休憩]、[HI・朝]の会話場面に比べて多いことが観察される。[HA・休憩]、

[HI・朝]の場面では「はい」「いいえ」を省略して付加部分か質問部分の繰り返し、またはいいかえの「そうです」部分が用いられているのである。但し、[HI・休憩]においては、「はい」「いいえ」が会議場面より高率で用いられている。この会話はなんとなくはずまないという印象を受けるのであるが、この結果と関連があるのではないかと思われる。今後詳しく「親疎関係」「年齢」「男女差」等を考慮に入れて分析していきたい。

以上、質問発話の形式と反応の出力の多寡を観察してきたが、今後、①母集団を増やすこと、②質問発話形式及び回答の種別を「内容」「男女」「親疎」「年齢」の別等を考慮に入れて分析すること、③質問発話の形式が、話題の継続展開にどのように寄与しているか、その談話上の戦略としての役割を分析することを課題としたい。

(注) CQによる質問に対する回答の形式上最長の組み合わせとしては以下のものが考えられるが、資料中にこのすべてがそろっているものは観察されなかった。

(話者A) : あの人学生？

(肯定か否定か＝新情報要求)

(話者B) : うん、 そうよ。 学生よ。 教科書もってるもの。

(肯定という新情報)(言い替え)(繰り返し) (新情報付加)

今回(言い替え)(繰り返し)の部分は回答ではあるが新情報付加と見なせず、「教科書もってるもの」の部分を要求されている(新情報)＝「はい」「いいえ」以外の付加情報と考えた。また「はい」「いいえ」の部分が省略されて(言い替え)(繰り返し)(新情報付加)部分のいずれか、またはその組み合わせが表現されたものを「はい」「いいえ」の省略された回答と見なした。

【参考文献】

- 現代日本語研究会（1994.5）『職場における女性の話しことば－自然談話録
音資料に基づいて－』財団法人東京女性財団1993年度助
成研究報告書
- 斎藤 里美（1989.8）「日本語教育における疑問文・質問文－コミュニケー
ション上の機能からみた日本語教材の課題－」『日本語
学』Vol.8, No.8
- 宮地 裕（1980）「疑問表現」『国語学大辞典』東京堂出版